

## 双胎間輸血症候群とは

双胎間輸血症候群(twin-twin transfusion syndrome: TTTS)は、双子の中でも「一絨毛膜性双胎」という胎盤が一つの場合のみに起こる病気です。このような双子では、胎盤の表面には「吻合血管」と呼ばれる互いの血液が行き来する血管が存在します。通常はお互いの血液が互いにバランスを保っており問題ありませんが、一絨毛膜性双胎の10%の方では、何らかの原因でこのバランスが崩れ、TTTS という病気を発症します。血液を送り出す胎児（供血児）は発育不全を起こし体重が小さくなり、尿量不足から腎不全を起こしたり、羊水過少となります。一方、血液を過剰にもらっている胎児（受血児）は全身が浮腫となり、心不全や胎児水腫という状態となります。

### どのような症状でしょうか

TTTS を発症した場合、多くは短期間で羊水過多となり、急激に子宮が大きくなりますので、子宮収縮が起こり切迫流産や切迫早産となります。増悪すると非常に早い週数でも破水、出血、陣痛が起こることがあります。

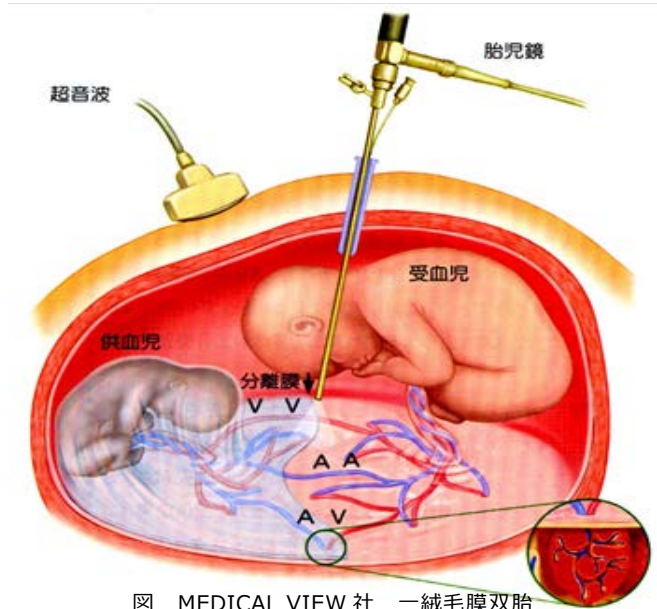


図 MEDICAL VIEW 社 一絨毛膜双胎  
基本から update まで 2007 より転載

### 胎児の予後について

残念ですが、かつてこの病気を発症した場合、80-90%の赤ちゃんは妊娠中か出生後に亡くなられていました。また、生存できたとしても、そのうち4人に1人の割合で脳性麻痺などのハンディキャップを発症していました。

### 治療法について

この病気は10数年前までは、日本でも治療法がなく、羊水過多を改善させるために受血児の羊水除去のみが行われていました。しかし、現在は胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー焼灼術が第一選択となっており、日本では専門施設において治療が行われています。この治療は図のように胎児鏡を子宮内に挿入し、吻合血管を熱凝固することで、お互いに行き来している血管を遮断します。この手術は妊娠16週から28週未満の妊婦様に行うことができます。

### レーザー焼灼術の成績

現在この手術により、児の生存率は80%前後、脳性麻痺などのハンディキャップの率は5%前後となりました。二人とも生存できる割合は70%前後です。残念ながら流産などで二人とも亡くなられる割合が10%前後にあります。

### 治療施設について

日本では、2015年7月現在当院を含め8か所で手術が可能ですが、中国・四国地方では川崎医科大学附属病院のみとなります。